

スモークサーモンの森

text by Shinji Ishii
文 いしいしんじ

冬になるとよく鮭に出くわす。白い息を噴きながら散歩道を歩いていると、向こうからぴちぴち跳ねてきて、ヒョイ、と尾ビレをもたげる、というのではなくて、うちの園子さんが土鍋のふたをあけると、大根や蕪のすきまを縫うように、スイスイ気持ちよさそうに泳いでいる。

園子さんはもともと東京のひと、僕は大阪生まれ。関西の人間は、東日本のひとにくらべ、それほど鮭になじんでいない気がする。少なくとも僕の子どものころはそうだった。鮭より鱒、真魚鱈なんかのほうがよほどポピュラーだった。

神奈川県三崎に住んでいたとき、地元魚市場に鮭があがったことが、大いに話題を呼んだことがあった。つまり、三崎の漁師や魚屋さんからしてさえも、鮭はふうう近海でとれる地魚でなく、遠く北海道漁

られる魚、と見られている、ということならんだろう。

子どものころ食卓にのぼった塩鮭は、こことくどピニールのパックにはいつていた。ちょうど冷凍食品が出はじめた時期で、あたらしもの好きの母が、生協を通じて定期的に買っていた。

ラベルに印刷された「ノルウェー」の文字に胸がおどった。外国産の食材がはるばるうちの台所にやってくるなんてなんてそれまで滅多にないことだった。

母はそれで「鮭のムニエル」なるものを作った。なんておいしかったろう！その後、一年に二、三度、家族の誰かがめでたく誕生日を迎えた夜、「鮭のムニエル」は、うちの台所で北欧の光を放ち、大皿の上に堂々と鎮座する運びとなった。僕のなかで「ノルウェー」は、おいしい国、上等な国、

けど、といってしょぼくされてバスルームで寝る。

翌朝おきると彼女はいなくなっている。僕は腹いせに火をつける。「いいね、よく燃えるわ、ノルウェーの板」。

森なんかいつこも出てこない。煙がたつ部屋のなかに、鮭が吊りあってもおかしくない。北欧趣味の「彼女」は、ワインのつまみに、鮭の燻製を出したかもしれない。ゲゲゲのあの妙なイントロはきくと、ジョンとポールが舞いたつ煙をイメージして、ゲラゲラ笑いながら作ったのだ。スモークサーモンの歌だったとは！

鮭エピソードをもうひとつ。2015年

「ムニエルの国」として定着した。

ノルウェー、と、ムニエル。こう並べてみると、なんとなく、兄弟のような、同義語のような響きがある。気がする。大阪下の小学生にとって、鮭の味はもちろん、外国語の響きも、その一音一音が、かみしめるたび口中に滋味がひろがるごちそうだったのだ。

中学に上がり、おこづかいのほとんどをレコードに費やすようになって（本は文庫本ならずすべてツケで買ってよかった）、僕は外国語の海に泳ぎだし、日々そこでおはれまくった。「ラバーソウル」は、「アビロード」の次に買ったビートルズのアルバムだった（たしか店のおっちゃん「ペパーズ」と「リボルバー」はまだ早い、とこちらを薦めた）。A面の2曲目に「ノルウェーの森」なるタイトルを見つけた。ムニエルの冬、長編小説「悪声」で、北海道新聞主催の「鮭児文学賞」を授賞した。賞品は、一万匹に一匹しかとれない幻の鮭「鮭児」という。はじめ「ふうん、でも、鮭でしょ」くらいにしか思わなかった。長く港町に住んでいて、魚のうまさのことは「知っていると自負していた。勘違いだった。ひとくち食べて僕は今まで食べてきたすべての魚に謝った。もちろん鮭児にも。ムニエルにもスモークにもせず、解凍したての生の鮭児を、僕と園子さんは息たえだえに手づかみで平らげた。

の匂いがふわんと僕のをくすぐる。

が、イントロで響いてきた音にぎよっとした。しゃれた北欧というよりゲゲゲの世界。インド楽器のシタールだとあとで知った。歌詞を目で追いつき、気がつけば、「ラバーソウル」のA面は、十代の僕がもつともくりかえし聞いた音楽となっていた。

大学生のある日、「ノルウェーの森」は誤訳だと知ったときの衝撃、笑いはすさまじかった。「ノルウェー産の材木で飾られたアパートの部屋」だと！にわかには信じられなかったが、歌詞の一部を担当したポール・マッカートニー自身が、「まわりでそんなダサイインテリアが流行っている」とインタビューでこたえている。

「僕」は「彼女」の部屋へ招かれる。僕はセックスしたくてたまらない。彼女はいなすように「これいい感じでしょ、だってステキじゃない、ノルウェーの板」。

彼女はなかなかやらせてくれない。ラゲにすわってワインを飲む。2時になる。「そろそろ寝ましょ。あたし、仕事で明日早いの」といつてケラケラ笑う。僕は暇なんだ



ノルウェー王国



面積 積: 38.6万 km² (日本とほぼ同じ)
人口 532万 8212人
(2019年1月: ノルウェー中央統計局)
首都 オスロ
言語 ノルウェー語
宗教 福音ルーテル派が大多数を占める

Profile

1966年大阪生まれ。京都在住。著書に小説『ぶらんこ乗り』『麦ふみクーツエ』『ポーの話』『みずうみ』『四とそれ以上の国』など、エッセイ『人生を救え!』(町田康共著)『熊にみえて熊じゃない』『遠い足の話』、絵本に『赤ずきん』(ほしよりこ絵)など多数。

